

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第124号 2025年4月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 昇格期の議論と大学の現在 —高野山大学の教育学科 学生募集停止のニュースを見て—	雨宮 和輝	2
本誌「月刊ニューズレター」への感謝の辞と新制日本史・世界 史の学習	神辺 靖光	6
文科省・私立大学の在り方検討会議の議事方向性について — 第1回会議(2025年3月)における主な意見 —	谷本 宗生	9
大正時代の女子高等教育(73) 金城女子専門学校(3)——文部省指定校をめざして	長本 裕子	13
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(13): 『最新全国学校案内』(明治44年)(2)	吉野 剛弘	19
(翻訳・解題) ヒュイツソン編『新版 教育学・初等教育事典』 所収の吉田熊次署名項目「日本」(1)	杉山 大幹 長谷川 鷹士	23
資料から見る「教育」の歴史② —『予科会誌』(慶應義塾予科会)—	山本 剛	27
『嘉納治五郎』(1964年)を読む(5) 第五高等学校校長 としての活動に関する後年の嘉納の見解(その3)	富岡 勝	30
刊行要項(2015年6月15日現在)		33
短評・文献紹介 ある卒業式の報道について(谷本)、照沼康孝 『日本史教科書検定三十五年』について(山本剛)、菅野真文 「異性装する「わたし」の授業」について(富岡)		34
会員消息 谷本、富岡		35

昇格期の議論と大学の現在
—高野山大学の教育学科学生募集
集停止のニュースを見て—

あめみや かずき
雨宮 和輝

近年、多くの大学においてその経営に大きな変化を生じさせる必要がある状況が続いている。女子大学は共学化し、学生数が足りない大学では学科の規模を縮小させる、あるいは、学生の募集そのもの

のを停止するといったニュースは、珍しいものではなくなっている。

自身の研究対象である宗教系私学はこのような状況下で、どのような影響を受けているだろうか。東京や京都といった都市圏にある宗教系私学は学生募集停止や規模の縮小といったニュースはあまり見られない印象を受ける。

特に仏教系私学については、むしろ学部を拡大する動きなどを見せている。例えば大谷大学は2018年に社会学部、教育学部を開設し、2021年には国際学部を開設している。立正大学も2021年にはデータサイエンス学を設置するなど、学科の組織再編をしている場合もあるが、募集停止や規模縮小といった方向性ではなく、むしろ、大学としての規模を拡大しようとする動きと見ることができる。

しかし、2025年4月8日、高野山大学のHPに以下のような文面が見られた。

【重要】文学部教育学科 学生募集停止について(<https://www.koyasan-u.ac.jp/notice/news/detail/5383/>、2025年4月28日最終閲覧確認)

ホームページの内容を見ると以下のような内容となっている。

本学におきましては、令和3年度より教育学科の運営に尽力してまいりましたが、近年の学生募集状況において厳しい状況が続いております。特に、昨今の社会的な動向として教職に対する関心の低下や志望者数の減少が影響しており、教育学科への募集は困難を極める結果となりました。このような状況を打開するべく、教育学科の教職員が一丸となり、募集活動に全力を挙げて取り組んでまいりましたが、残念ながら状況が大きく改善するには至らず、慎重な検討を重ねた結果、このたび教育学科の新規募集を停止す

る決定に至りましたことをご報告申し上げます¹

ホームページの内容を見る限り「昨今の社会的な動向として教職に対する関心の低下や志望者数の減少が影響」していたために、高野山大学文学部教育学科では学生募集を停止するということになる。

昨今、教員を目指す学生が少ないという事実が社会的な問題となっているのは理解できるが、先述したように、立正大学や大谷大学が新たな学部を開設している一方で、高野山大学は教育学科の学生募集を停止している。この違いを考えた時に、大学昇格期から危惧されていた要因が存在していると言える。そこで、大学昇格期における高野山大学におけるある言説を見ていきたいと考える。

高野山大学の大学昇格については関東教育学会²において、大学昇格を巡って、当時、京都と高野山、どちらの専門学校を大学に昇格させるかが議論されたことを考察した。その議論についての詳細は紙幅の関係から省略するが、1919年1月1日の『六大新報』793号を見ると「吾宗教育問題の解決」というタイトルで宗派内関係者からの意見が複数の記事として寄せられている。

その中で真言宗の僧侶である佐伯恵眼は「大学の位置」という項目の中で「大学に於て世間の学術をも併せて教授する以上は、常に世間の学術界と接触して居らねばならぬから、是非共学術の府学者の淵業たる東京か京都に其位置を選ばねばならぬが、東京には自宗の本山もなく、又寺院も関東地方には比較的少数であるから、之を京都に置くべきである」³として、京都に大学を置くべきであると述べた上で「高野山に於ては自宗部のみを教授するには困難を感じないであらうが、他宗部を教授するには京都の方が遥かに便利である。況や世間の学術をやである」⁴として、高野山に大学を置いた場合は、自派の教義を教授するには便利であるが、それ以外の学問、例えば非仏教的な学問を教授するには適していないと述べている。

また、高野山に大学を置いた場合、教員や学生をどのように集めるのか、教員や学生が研究心を起こして研究に取り組めるのかといったことも問題視している。佐伯は「金さへ出せばどんな学者でも高野山に集めることが出来る、と云ふけ

れども同じ金で京都で出すにすれば数層倍の学者を集めることが出来る、又いくら金を出したとて図書館もなく、書店もなく、意見を交換すべき僚輩も居らず、其上生活に不便利なる高野山に研究心ある世間の大学者が喜んで行く筈はなからうではないか」⁵と述べている。

さらに「学生の方に付て言ふても沈滞し鬱閉した空気の中で社会の文明と絶縁されて居つては何等研究心を策励すべき刺激がない、稀に研究心を起こすものがあつたにしても、図書館もなく、他宗の学校も帝大もなく、従て諸方面の学者に接することの出来ぬ様な山奥では研究らしい研究をすることは困難である」⁶と述べている。佐伯は高野山に大学を置くことは、教員や学生を集めにくいだけでなく、研究に取り組める状況を作り出すのも困難であると指摘している。その上で佐伯は高野山に大学を設置することは「昔の大学林に立還らさうとするのであるが、斯くなつては事実 に於て大学の廃滅である」⁷であると指摘している。

以上のように、高野山大学の大学昇格時の議論から生じた言説を見ると、今から100年以上前において、高野山に大学を設置した場合のリスクが危惧されていたことがわかった。ただ、100年前のこの時期において教育学科は設置されておらず、そもそも、教員養成を実施するとは考えられていなかったであろう。教育学科の学生募集停止は、先述したように、現在の社会の動向に起因するものである部分も大いにあると考えられる。

ただ、今後、全国の大学の運営を考える場合に「大学の位置」というのは学生が大学を選択する上で大きな要素となってくることは間違いない。つまりは、どれだけ大学にアクセスしやすいのか、ということであると考えられる。

そして、そのアクセスというのは、もはや通学の距離的な話だけではない。通学をしないでオンラインのみでの大学という形も登場してくるだろうし、実際にすでにZEN大学がその形態として設置されている⁸。また、これまで郊外にキャンパスをおいていた大学も都内へ戻って来るといふ動きも多くある。中央大学の法学部が多摩キャンパスから茗荷谷に移転したという話は聞いていたが、調べてみると、それ以上に各地の大学が、都市の中心部へと移転する計画をしていることがわ

かった⁹。今後は、オンライン上まで含めて「大学の位置」というものを考えることが、大学の経営では大きな課題となってくると考えることができるだろう。

註

¹【重要】文学部教育学科 学生募集停止について (<https://www.koyasan-u.ac.jp/notice/news/detail/5383/>、2025年4月28日最終閲覧確認)。

²関東教育学会 第69回大会(2021年11月20日(土))。

³六大新報社「教育問題の解決」『六大新報』(1919年1月1日、793号)31頁。

⁴六大新報社「教育問題の解決」『六大新報』(1919年1月1日、793号)31頁。

⁵六大新報社「教育問題の解決」『六大新報』(1919年1月1日、793号)31頁。

⁶六大新報社「教育問題の解決」『六大新報』(1919年1月1日、793号)31頁。

⁷六大新報社「教育問題の解決」『六大新報』(1919年1月1日、793号)31頁。

⁸ZEN大学 (<https://zen.ac.jp/>、4月30日最終閲覧確認)

⁹「都心回帰」が相次ぐ大学 東洋大は志願者10万人突破 キャンパス移転の価値とは?【前編】、<https://www.asahi.com/thinkcampus/article-110701/#:~:text=2023%E5%B9%B4%E6%9C%88%E3%81%AB,%E3%82%AD%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%83%91%E3%82%B9%E3%81%B8%E7%A7%BB%E8%BB%A2%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82>、最終閲覧確認

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

本誌「月刊ニューズレター」への感謝の辞と^{ことば}

新制日本史・世界史の学習

かんべ やすみつ

神辺 靖光 (ニューズレター同人)

本誌発行直後から私は「逸話と世評で綴る女子教育史」「我流文献紹介」の題名で駄文を本誌に連載させて貰った。そのお陰で私は生涯かけた近代女子教育史を親友の長本裕子氏との共著で本年1月に上梓できたと、本年中に『明治前期中学校形成史・総括編』^{めやす}を上梓できる目安がついた。感謝のほかはない。

さて私が新制早稲田大学大学院の尾形裕康教授の指導を受けて日本教育史の研究をはじめた頃、ピアニストの西村八重子と恋愛結婚したので尾形教授の^{げさりん} 逆鱗に触れ破門されたことはこれまでどこかで書いた。新制大学院なので定められた学習・研究科目を履修修得してから都内の私立高等学校を探索し、友人の紹介で東京文化高等学校教諭になることができた。

いずれ日本教育史の研究に舞い戻るつもりだったが、まずは目の前に立ちはだかる社会科日本史、世界史に挑戦せねばならない。旧制中学校の生徒であった頃、二年生で東洋史(インド、中近東、中国史)と三年生で西洋史(ヨーロッパとアメリカ大陸)を習ったが概略にすぎない。よい機会だとばかり戦後の新しい東洋史・西洋史を学び直そうと決意した。

私が新制高等学校の社会科教師になって新しい日本史、世界史に立ち向かった時の前年、戦後2回目の「学習指導要領」の改訂があつて社会科の教科書が大改善された。私の前任者が日本史の教科書を発注していたので教員室の私の机の上には京都大学国史学科主任教授小葉田淳博士著述の『新制日本史』およびその「教師用参考図書」が置かれていた。当時東京の教員間では「日本史なら京都大学発行もの」と言われていた。教師用の参考図書をみると、まさに「至れり尽くせり」^{じょうだん}のサービスで生徒を笑わせる冗談まで記載されている。興醒^{きようざめ}してしまつたが、すぐに奮起一番、この教科書の真価を問うてみせると決意した。

朝鮮戦争がはじまり、軍需景気に湧いた頃なので出版も景気よく各種の叢書

が贈られてきた。その中で国際文化情報社の『画報・近世三百年史』（十二集）、『画報・近代百年史』（十集）は全頁、図版と写真で埋められた画期的な史書であろう。恐らく第二次大戦中、特殊技術として磨かれた空中写真の技術を駆使しての成果である。斬新な史料だと思ったが高値であった。だが無理に算段して買い求め、私のこの高校に在職中、教育史研究の基盤になるはずの新しい日本史世界史の学習→検討→研究に没頭する決意を固めたのである。

当時の私の勤務状態を顧りみると1週20時間の日本史の授業のほかキャンデイト（博士論文呈出資格試験）のための漢文学習（四書五経の素読）や、併設の短期大学図書館で寄贈された学校史を読み漁っていた。するとあるコーナーに新渡戸稲造関係の蔵書があるではないか。司書に聞けば誰も読む者が居ないから読んでくれ、時折、現学校長から補充せよと言われて古書店から求めているとのこと。それから時間をみつけては短大の図書館で新渡戸稲造の蔵書を読み漁った。

こうした事情を森本静子学長は司書から聞いたのであろう。ある時、私を呼んで現東京文化高校再興の秘話を話した。即ち女高師出身のある女史が、この地に高等女学校をたてたが不慮の病で急死したので生徒たちが困った。それを見た新渡戸稲造が森本厚吉を呼んでこの女学校を再興させたのだと。この話はあまり知られていないから神辺の口から拡めてくれとも述べられた。そして森本学長の意向で私は全生徒の前で口演する機会が多くなった。当時、東京開府百年の記念講演も森本学長の意向で行われたが征討軍の西郷隆盛と江戸徳川軍の代表・勝海舟の胆芸で江戸東京の市民が助かった秘話を私が口演した。

私が東京文化高校の教員になって5年目、学校の内外は急変貌していた。学校内をみれば相次ぐ建築、増築によってキャンパス内の敷地が狭くなり、その中に幼稚園、小学校、中学校、短期大学、医学技術学校がひしめき合うのだから運動会、文化祭等の行事をするのも計画するのも大変であった。隣地の買い増しは絶えずやっていたし、一丁ばかり離れた寄宿寮もそのガーデンもフル回転に使っていたが、それでも足りなかった。中でも高等学校の膨張は戦後生まれの十六

歳女子が雪崩^{なだれ}を打って押し寄せる勢いであった。学校当局の責任は学監と称する現学長の令息でその任務を着々果たしていた。脇から傍聴している私も感嘆の外なかった。しかるにこの時、不祥事が起った。暮夜ひそかに教員室備えつけ金庫に収納された入学試験成績表を当校のS主事(学校長代行者)が書きかえていたところをたまたま用事で教員室に戻った女教員に目撃されてしまったのである。直ちに学校長に報告され、S主事は臍首^{くび}(免職)になり、教務主任であった国語担当のT氏が主事に昇格した。この人物、悪い人ではないのだが、校長代行たる主事を尊大な存在と感じたらしい。挙措動作が急にあらたまり人を見下す態度をとるし、人に要求する。教員はみな都会の大学出身者ばかりであるからおかしくてたまらない。ある年の4月、当時、わが校内は増築中で運動場がとれないので5月に予定された球技大会が開けない。仕方ないので近くの警察学校の運動場を借りることになり、T主事が直ちにでかけ契約を結んできた。しかるに体操教員が実地見学したところ、そこには女子用便所がないことがわかった。仕方なく工事中の学園内で工夫して球技大会をすることになり、警察学校には詫^{わび}を入れることになったのである。

ここへきてこの新前主事はまたぐずり始めた。そんな恥ずべき行為は男子たるべきものでできないと言うのだ。あまりの小心翼翼^{よくよく}に教員一同、呆れ果てたが、教務係をしていた私神辺^{あやま}が謝りに行くことになり謝罪文を書き署名した。以後、急速にT主事は身を引き、昭和37年3月、辞表提出、私神辺が4月、高校主事に就任、T元主事は国語の教諭になって停年まで勤務したのである。

文科省・私立大学の在り方検討会議の議事方向性について

— 第1回会議(2025年3月)における主な意見 —

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

文科省は、これからの急激な少子化の動向も意識して、2025年2月～翌26年3月の間に「2040年を見据えて社会とともに歩む私立大学の在り方検討会議」(有識者会議)を組織して、有意義な議論をまとめて積極的な問題提起を行うものと発表した。毎月定期的に検討会議を行い、その議事などをひろく公開する方針としている。今回は、文科省がさっそく公開した、第1回会議(2025年3月)の主な意見と今後の方向性について紹介しておきたいと思う。

1.私立大学が果たす役割について

○私学が果たしてきた歴史的経緯も踏まえつつ、現在は、私立大学が、地域人材育成やグローバル人材育成、国際競争力強化に資する研究振興など、さまざまな観点で主要な役割を果たしていることに基づいた諸施策について検討していくべき。

○教師、保育士、介護士をはじめとした地域のエッセンシャルワーカーや地域の製造業の中核となる高度技術者、さらには地域経済を支え、地域活性化の担い手となる地域中核人材等の育成など、地域の人材育成インフラとしての私立大学の役割は大きい。

○建学の精神を活かした先導性、地域とともにある多様性、地域社会との近接性といった私立大学の役割は堅持すべき。

○産業構造の変化を踏まえ、産業界とともに高度専門人材をいかに育成していくのが重要。関係省庁において、将来必要な人材需要について見定めうえで、高等教育機関として養成すべき人材の方向性を検討していくべき。

○知の拠点としての大学と地域の産業政策が、連携のみならず、産学融合していくことを目指して検討していくべき。また、リカレントやリスキリングの在り方についても検討していくべき。

2. 地域の人材育成に向けた私立大学の在り方について

○大学が大都市に偏在することにより地方から若者が流出することを危惧する。地域的な私立大学の在り方や地方私立大学の学部構成、国公立大学との関係等について、全国的な視点で検討していくべき。

○大学はまちづくりと一体であり、人材育成機関としてのみならず、学生が居ること自体に重要な価値があるというひろい視点で検討していくべき。

○地域活性化のため、国公立大学の協調はきわめて重要であり、国の支援も必要。

○私立大学は県内入学率や県内就職率が高いなど、地域社会の振興・発展に大きく寄与しているが、地方では定員未充足の状態が生じる傾向もある。私立大学と地域社会とが協力し合うことで双方が発展していくことができる環境づくりが重要。

○地域の大学間や、大都市大学と地方大学との連携強化に向けた支援の充実について検討していくべき。

○地域に必要な地方中小規模大学が引き続きその役割を果たしていくため、大学間で連携し、分野や提供科目の分担や事務の共同化などにより効率化を進め、コストダウンを図り、持続可能性を持たせるような取組みを検討していくべき。

○地域人材を必要としている地方公共団体や産業界等の参画・協働を拡充することが重要であり、それぞれがより積極的に関与する仕組み、インセンティブを見出していくことが必要。

○安易な公立化を防ぐとともに、適正な競争環境を確保するため、地方公共団体が公立化を検討する際に必要なプロセスや留意点などを示すことを検討していくべき。

○地域に留まらざるを得ない事情を抱えた学生を積極的に受入れて、地域ニーズに合致した専門人材として養成する地方私立大学の取組みをより高く評価する枠組みの構築を検討していくべき。

○大学に対する認証評価制度の在り方について、とくに、地方私立大学は、地域にとって必要不可欠で地域ニーズに合致した専門人材を輩出することなどに努めているか否かを重視する方向性で検討していくべき。

○地域にとって必要不可欠で地域ニーズに合致した専門人材を輩出するための一貫教育を提供する観点に立ち、初等中等教育との連携・協働を積極的に推進していくべき。

3. 私学への財政支援等の在り方について

○地域人材やグローバル人材育成、国際競争力強化に資する研究振興、地域創生など、さまざまな観点で重要な役割を果たす私立大学への基盤的経費をはじめとする支援の拡充は不可欠。

いっぽうで、一律の配分ではなく、取組み等に応じたメリハリ・重点化を図っていくことが重要。

○重点化の観点としては、たとえば、

- ・地方において、地域ニーズに応え、地域経済の担い手となる人材の輩出
- ・国際競争力の強化に資する研究環境の充実
- ・日本の産業を支える理工農系分野における人材の育成
- ・看護師、介護士、教師、保育士等のエッセンシャルワーカーの養成
- ・大学の教育研究の質の向上に向けた取組み

などが考えられ、今後さらに検討していくべき。

○米国と日本では、大学収入の構造にかなり違いがあり、寄附金の充実などをはじめ、私立大学の収入の多様化を検討していくべき。

この私立大学の在り方検討会議では、これから日本の私立大学が果たす役割などを抜本的に検討し大局的に議論する・・・ということであるが、残念ながら2025年度末までの短い間に一定の結論を得て、政策提言を行うという、慌ただしさをつよく感じてしまう。すでに文科省は、2026年度から、経営状況などに問題がある私大100法人ほどに対して適切な指導・助言を与え、それを踏まえ私大側は改善(学部学科の再編や学生募集の停止など)を行うとする「経営改善計画」を策定し提出させる方針と報道されている。それでも経営改善されない私大法人に対しては、計画的な規模縮小や撤退を促す通知を発するという。おそらくこの私立大学の在り方検討会議においても、私学側の健全な財政基盤に関しての問題点を厳しく指摘し、経営改善が見込めない私大法人らに対しては、文科省へ毅然とした行政措置をつよく図るよう問題提言するのではないだろうか。

少なくとも、教育史・大学史研究者である私としては、これまで多様な日本の私立大学がどのような社会的な存在としてそれぞれ歩んできたのか・・・という、ドラマチックな私学独自の歴史的な位置付けや役割などを、しっかり理解や認識を深めてほしいと願うばかりである。当該の学生数や経営数値だけでは、けっしてはかり知れない私立大学としての、それぞれのスクール・ヒストリー(学園物語)をほんとうに知ってもらいたい!と心から考えている。法人の経営状況が残念ながら芳しくなく改善が前向きに見込めないから、はい、整理統合です!といった、きわめて経営システムとしての安易な発想にだけは陥ってほしくないのである。

大正時代の女子高等教育(73)

金城女子専門学校(3)——文部省指定校をめざして

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

新校舎落成

金城女学校は、1908(明治41)年5月28日、金城女学校で起こった地久節不敬事件によって、生徒が38名に激減し、神戸神学校との合併が議論されるまでに追い込まれた。こうした状況下、救いとなったのは、同年10月、理事ハリーマイヤスとその姉マーサ・マイヤス・ローガンの寄付によって建築された新校舎の完成であった。1階は200席を擁する講堂で、当時「大講堂」と呼ばれ、以後30年近く講堂として使用されることになる。2階には3教室あった。同年11月、落成式が准献堂式として行われた。宣伝を兼ねて文芸会が開催され、400人が招待された。

1909(明治42)年の金城女学校の状況

1909年ごろの金城女学校の様子を述べよう。

教科目

高等女学科:修身、国語、英語、数学、地理、歴史、理科、図画、音楽、体操、教育、家事、裁縫、手芸

高等文科:修身、国語、漢文、英語、心理、教育、体操

授業料は月額1円

卒業生の状況

卒業生総数112名(未婚者71名、既婚者36名)

未婚者の内、保姆4名、小学校教員12名、中等学校教員6名、伝道師4名、会社事務員3名、上級学校在学者18名、家庭24名、死亡5名
キリスト教信者79名

卒業生の約70%がキリスト教信者である。また、卒業生で牧師と結婚した者が5名、自ら伝道師となった者が4名である。職員も同志社、明治学院、東京女子学院、神戸女学院などキリスト教学校卒業生が半数以上であった。当時の金城女学校がいかにキリスト教精神に満ちていたかがわかる。

エラ・ヒューストンの死、シャーロット・タムソン第七代校長に就任

1912(明治45)年4月、学則を改正し、高等女学科5年、高等文科2年とする。しかし校長のヒューストンが病に倒れた。『ニューズレター』第123号で記した明治32年問題や、地久節不敬事件など内外に問題を抱え、長い間の苦闘が影響したと思われる。手術を受けたが回復できず同年5月5日に亡くなった。47歳であった。同日午後葬儀を講堂で挙行し、翌朝、名古屋市にある覚王山基督教共同墓地に埋葬された。1892(明治25)年に1年の予定で金城女学校に赴任し、そのまま19年間金城女学校の教育に尽力した。

同年5月8日、シャーロット・タムソンが第七代校長に就任した。タムソンは、1882年12月、米国サウスカロライナ州で、父も祖父もリバティ・ヒル長老教会の長老という家庭に生まれた。サウスカロライナ州の高等師範学校であるウインスロップ・カレッジを卒業し、3年間公立学校で教えた経験を持つ。



第七代校長シャーロット・タムソン(『金城学院百年史』より)

1908(明治41)年米国長老教会外国伝道局から任命され、同年11月29日神戸に入港し、12月7日金城女学校に着任した。金城よりも後から創立された高等女学校に遅れをとっている危機感から、伝道局が派遣した教育宣教師であった。しばらく徳島と東京で語学研修をした後、聖書と英語を担当し、ヒューストン校長を補佐していたが、ヒューストンの死後校長に任命された。明治45年7月30日明治天皇の薨去により、時代は大正時代となる。

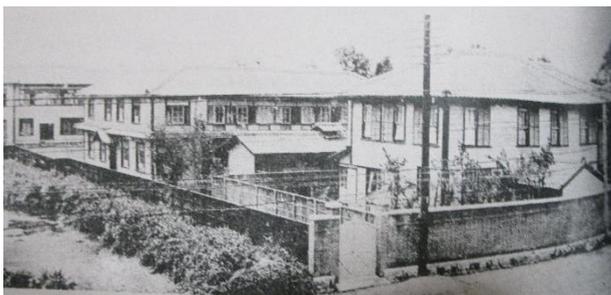
タムソンが校長に就任して最初に直面したのが、生徒の激減により、神戸神学校敷地に移転して女学校を設立してはどうかという議論であった。しかし、これは名古屋教会牧師吉川逸之助の反対により不問となった。こうした状況から回復するために、タムソンを補佐し、次々とアイデアを出して、窮地を救ったのが後に第九代校長となる市村與市であった。

市村與市の就任

1913(大正2)年3月、教頭の鈴木喜四郎が地理と歴史の中等学校教員免許状を持っていなかったため、自ら辞表を提出し、兵庫県の群立女学校に転任した。同年9月、米国南長老教会の宣教師で創立当初からの協力者R.E.マカルピンの推薦により、京都帝国大学などで学んだ市村與市が教頭に就任し、立て直しを図っていった。

市村が就任した当時の専任教師は、宣教師2名を含めて8名、舎監1名、男性教師は市村のみで、生徒数わずかに38名であった。市村が最初に行ったのは、文部省の指定を受けるための学則変更の届出文書の作成である。1912(明治45)年に改正された高等女学科5か年、高等文科2か年を廃し、本科4か年、補習科1か年と改正した。当時の高等女学校普通科4か年に倣ったのである。そして、新任教師として男性2名、女性3名、書記1名を1912年1月から3月までに採用した。

大講堂を除き、計画されていた大改築と新築は、1913(大正2)年3月から翌年3月までかかった。寄宿舎、教師館、新校舎が完成し、3月に移転した。この大改築と新



1913年の校舎全景

(『目で見る金城学院の100年中』より)

築の指揮は校主兼建築委員長のウィリアム・ブカナンが取った。この時の建築資金は、米国南長老教会日曜学校の生徒たちが集めた献金3万2,200円であった。日曜学校の生徒たちが鶏を飼って卵を売ったり、両親の手伝いをしてもらったお金をためたりして献金した尊いお金であった。

新装の校舎は後に「本館」と呼ばれ、大講堂、普通教室4、理科特別教室、地歴・図画・習字特別教室、音楽特別教室、裁縫特別教室、日本作法室、整容作法室、割烹実験室、音楽練習室7、図書室、校長室、事務室、職員室、応接室、生徒控室、通学生食堂、理装室等からなり、衛生上・学習上の便利を考え、光線・色彩・音響等を考慮して建てられた。運動場は約300坪、テニスコートや運動機械があり、それぞれの建物の周囲には花壇が造られ、四季おりおりの花で彩られた。ルネッサンス式木造建築で、生徒や教師たちの机は素晴らしいものであった。『名古屋新聞』（大正2年12月14日）の記者は、

椅子、卓子、机などはいづれも栗色に塗られて、渋い、しつとりとした、色合いを見せていた。こんな立派な机や椅子を有った学校は、恐らく他に見ることが出来まいと思はれた。（『金城学院百年史』より）

と報道している。

1914（大正3）年3月、第19回卒業証書授与式が新校舎で行われた。70余名の来賓を迎え盛大に行われた。卒業生は高等女学科9名、撰科1名であった。卒業生10名のうち9名がクリスチャンであった。2名は教師として戻ってくるためにさらに上級学校へ進学し、1名は学校の書記となった。同年4月、入学式が行われ、入学者は20名であった。

教頭市村のアイデアで、教師たちが名古屋市内の全小学校を訪問して、校長を8人ずつ放課後招待し、新校舎や寄宿舎を紹介した。校舎を案内しながら説明し、学校案内を手渡し、西洋館で素晴らしい西洋料理でもてなした。ブカナン夫人、マカルピン夫人も接待に一役かった。生徒を集めるためと学校を知ってもらうための広報活動であった。その後校長タムソンは、市内で招待した校長たちに出会うと丁重な挨拶を受けたという。

文部省指定校となる

新校舎が完成し、教員人事も整い、高等女学校令に基づいて学則を改正し、学科課程も整い、文部省指定校の申請を行い、1915(大正4)年3月、認定された。文部省令第14号専門学校入学者検定試験規程第8条第1号により、「授業年限4箇年の高等女学校卒業生と同等以上の学力を有する者と認定」されたのである。校名は「私立金城女学校」とし、ようやく高等女学校の仲間入りを果たしたのである。理事や教師、生徒たちにとって大きな喜びであった。

創立25周年・新校舎落成・文部省指定記念祝賀式挙行

1915年10月、正しくは前年の1914年が25周年であったが、同年4月に美子皇太后が薨去したので、祝賀を延期して、1年遅れて創立25周年・新校舎落成・文部省指定記念の祝賀会が行われた。金城女学校開校以来の一大イベントで、準備は6月から学校を上げて取り組んだ。

来賓リストの作成、同窓生全員への招待状、午餐会・祝賀式会場の準備、式後の来賓の茶菓接待、お土産などの準備である。午餐会のメニューは、校長のタムソンがブカナン夫人の助けを得て担当した。午餐会の会場準備のためにタムソンは、友人から大きなテントを、名古屋中学校からテーブル25脚、キリスト教に反対していた校長の中学校からも椅子と小さなテントを借りた。名古屋市公会堂から椅子60脚、名古屋在住の外国人からテーブルクロスを借りた。マカルピン夫人とブカナン夫人は午餐会のテーブルと来賓応接室に生け花を飾った。講堂はぶどうと紅白のバラの花で飾られ、壇上には祝いの松が置かれ、その傍らに黄色の菊が大きな花瓶に生けられた。校門には日の丸が交差して掲げられ、アーチの上には「祝賀」と書かれていた。これらの飾りつけはすべて教師と生徒たちが中心になって当日の10時半までかかって行った。飾りつけなどに日本の伝統も取り入れて和洋折衷にしあげ、地域の人々に受け入れられるように配慮したと思われる。

1915年10月15日、正午、まず午餐会が始まった。3年・4年生たちがウェートレス役を担った。来賓の愛知県知事代理、名古屋市長夫妻を始め、第八高等学校校長、中学校校長、女学校校長、東区内の小中学校校長、新聞記者、各教会牧師、宣教師ら総勢103人の西洋料理の午餐会であった。

午後1時から講堂で祝賀式が行われた。生徒を含め約200人の出席者で、2時間にわたる祝賀式の後、来賓を茶菓で接待し、風呂敷に包まれたお土産が渡された。お土産は、『第25周年記念号 緑野』第4号、記念の絵葉書、校紋形のケーキ、福音書冊子であった。

その後、講堂前の校庭で記念植樹式が行われた。金城女学校の校紋である月桂樹の若木1本が植えられた。タムソンが朗読した植樹の辞は、『緑野』第4号、校紋、1915年の標語「凡ての事感謝すべし」、職員名簿、生徒名簿などとともに小さな瓶に入れられ、月桂樹の傍らに埋められた。

参考文献

『金城六十年史』

『金城学院八十年史』

『金城学院百年史』

『目で見る金城学院の100年史』

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(13):

『最新全国学校案内』(明治44年)(2)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号は、前号に引き続き1911(明治44)年に内外出版協会より刊行された内外出版協会編『最新全国学校案内』を取りあげる。

今号では、「三 東京所在私立高等及普通予備校」の「普通予備校」に掲載された情報を取りあげる。

普通予備校

正則予備学校(神田区錦町三丁目)

同分校(芝区三田四国町)

本校は高等及中等普通科中主として、数学、物理、化学、博物、国語及漢文を正則に且速成に教授する所である。

午前部(自午前八時至正午十二時)

一、高等受験科 中学卒業以上の学力を有する者の為、其の卒業程度以上に依り専ら数学、物理、化学及国語漢文の諸学科を教授し、以て高等学校及其の他諸官立学校に入学するの準備を為さしむ。授業は前期(自九月至十二月)後期(自一月至三月)の二期に分ち、毎週授業二十四時間とす。

二、数理化受験科 中学五年若くは卒業以上の程度に依り算術、代数、幾何、三角法、物理及化学の諸学科を教授し、高等学校及其の他の諸官立学校に入学するの準備を為さしむ。毎週授業二十四時間とす。

三、初等数理化受験科 中学四年へ入学せんとする者、若くは特に此の学科を履修せんとする者の為、中学校三四年程度に依り算術、代数、幾何、三角法及

初学の物理及化学を教授す。其の毎週授業二十四時間とす。

四、中学相当科 或事故に由り中学に入学せざる者、又は相当学校に入学せんとする者の受験準備の為、中学校一、二、三年程度に依り数学、物理、化学、国語、漢文、博物及地文の諸学科を学年相当の程度に依り教授す其の毎週授業二十四時間とす。

午後部（自午後一時至午後五時）

一、正則補習科 高等諸官立学校の入学試験に応ぜんとする者の便利を図り、正則英語学校の英語と本校の数学、物理、化学及国語漢文とを合併し、中学補習科程度に依り、是等の受験学科を教授す。其の毎週授業三十時の内十五時間とす。

二、数理化受験科 午前と同じ。

三、中学相当科 午前部初等数理化受験科及中学相当科と同じ。

夜学部（自午後六時至午後九時）

一、甲種数学科 速成に数学を修学せんとする者、又は高等諸官立学校に入学せんとする者の為に、中学五年若くは卒業以上の程度に依り、算術、代数、幾何及三角法の諸学科を教授す。其の毎週授業十七時間とす。

二、乙種数学科、中学校三、四年程度に依り算術、代数、幾何及三角法を教授す。其の毎週授業十七時間とす。

三、丙種数学科 初学者若くは中学二、三年に入学準備を為さんとする者の為に、中学校初学年程度に依り算術、代数、幾何を教授す。其の毎週授業十七時間とす。

四、物理化学科 高等の学校へ入学せんとする者、若くは特に理化を専修せんとする者に、中学五年若くは卒業以上の程度に依り、物理学及代数学を教授す。其の毎週授業十七時間とす。

臨時受験部（毎週授業二十四時間）

一、臨時受験科 毎年四月より六月迄、午前及午後の二回に当科を開設し、中学卒業生にして、高等商業其の他諸官立学校等に入学せんとする者の為に、中学卒業程度以上に依り、入学試験科目の諸学科を教授す。

二、夏期講習会 夏期休日間毎年七月より八月迄諸学科の講習会を開く。其の学科程度及時間等は其の都度之を定む。

学年は九月一日に始まり翌年六月三十日に終る。之を第一学期（自九月一日至十二月二十五日） 第二学期（自一月八日至三月二十五日） 第三学期（自四月一日至六月二十五日）の三学期に分つてある。

学費は東脩夜学部金五十銭、其の他は各金一円。

授業料は左の通りである。

学科 学期	受験科 中学相当科	正則補習科 (英語部ヲモ含ム)	夜学諸科
第一学期 九月十月十一月 十二月	全納金四円 分納一箇月金一 円二十銭	全納金六円 分納一箇月金一 円八十銭	全納金三円五十 銭 (分納一箇月金 一円)
第二学期 一月二月三月	全納金三円 分納一箇月金一 円二十銭	全納金四円五十 銭 分納一箇月金一 円八十銭	全納金二円五十 銭 (分納一箇月金 一円)
第三学期 四月五月六月	全納金三円 分納一箇月金一 円二十銭		全納金二円五十 銭 (分納一箇月金 一円)

修業年限は高等受験科及正則補習科各六か月、其の他は各三箇月である。
校長は齋藤秀三郎氏。

「普通予備校」としては、正則予備学校以外に開成予備学校と錦城予備校が掲載されているが、修業年限四年の課程のみが掲載されているので、ここでは省略する。「普通予備校」の最後には、以下のような記述がある。

其の他尚此の主の学校は少なくないが、多くは中学校の余業であつて、孰れも規則に大差がないから、一々は掲げない。

開成中学校あるいは錦城中学校内に設置されていた両校も、主として専検受験者向けに設置されていたのであって、掲載の有無は別として同列のものと考えてよい。この時期から高等学校や専門学校を受験するもの向けの機関は「高等予備校」と称される一群と見なされはじめたことが示唆されているような感もあるが、このためには別の進学案内書も検討する必要がある。

次号では、『最新全国学校案内』と同じ 1911（明治 44）年に刊行された『男女立志之羅針盤 東京就学乃栞』に掲載された情報を検討していく。

(翻訳・解題) ビュイッソン編『新版 教育学・初等教育事典』所収の

吉田熊次署名項目「日本」(1)

すぎやま だいき はせがわ ようじ
杉山 大幹(鹿児島大学)・長谷川 鷹士(上越教育大学)

〔解題〕

本連載では、フランス第三共和政を代表する教育学者・教育行政官のひとりとして知られるフェルディナン・ビュイッソン(Ferdinand Buisson, 1841-1932年)が公刊した『新版 教育学・初等教育事典』に立てられた項目「日本」の翻訳を試みる。

フランス第三共和政のもとで初めて公教育は確立された、としばしば言われてきた。初期に公教育相を務めたジュール・フェリー(Jules Ferry, 1832-1893年)のもと、無償性・義務性・世俗性[ライシテ]を兼ね備えた初等教育が実現されたからである。フェリーの教育改革を支えたビュイッソンは、新しい初等教育制度のもと、小学校教諭が「あとに続くべき道を指し示す⁽¹⁾」べく、初等教育局長在任中の1882年から1887年にかけて『教育学・初等教育事典』(*Dictionnaire de pédagogie et d' instruction primaire*, 1882-1887)全4巻を刊行した⁽²⁾。この『事典』は、共和派の推し進める学校教育改革の理念を現場へと浸透させるという時代的な使命を背負ったメディアだったのである。

1911年には、項目を精選し内容を改めた一巻本の第二版が公刊された。それが、本連載が扱う項目を含む『新版 教育学・初等教育事典』(*Nouveau dictionnaire de pédagogie et d' instruction primaire*, 1911)である⁽³⁾。発行部数が『事典』第一版に比して少なかったためか、第二版についての研究には第一版に関するものほどの蓄積がないが、各項目を見てみると変更点も多く、より注目されてしかるべき素材であるように思われる⁽⁴⁾。

項目「日本」は、第一版にて立項され、第二版に引き継がれた項目の一つである。第一版のものは無記名であり、著者は不明だが、その記述からしてフラン

ス人であろう。第二版のものは末尾に《 K. YOSHIDA, / chargé de cours à la faculté des lettres de l' université de Tôkiô, et professeur à l' école normale supérieure des filles 》、すなわち「K. ヨシダ、東京帝国大学文科大学助教授、女子高等師範学校教授」と署名がある。氏名および肩書から、このK. YOSHIDAは、戦前日本の教育学研究を主導した教育学者吉田熊次(1874-1964)のことでであると認められる⁽⁵⁾。また、吉田に東京帝国大学文科大学助教授兼任の辞令が下された1907年10月以降に本項目は完成したものであることがわかる⁽⁶⁾。なぜ吉田が『事典』第二版に寄稿することとなったのか、その経緯は定かでない。1904年から1907年にかけてヨーロッパに留学していたため、その際『事典』編纂者側と接点を持ったのかもしれない⁽⁷⁾。

吉田の手による第二版の項目「日本」は、第一版の同項目を概ね引き継いだ前半部と、新しく書き加えられた後半部からなる。「概ね」と述べたのは、日本の教育史を古代から書き起こす前半部の記述には、細かな修正がいくつか施されているほか、1880年頃から1910年頃までの日本の教育動向が吉田の手で追加されているからである。新たに書き加えられた後半部は、当時の日本の教育行政を担う各種組織についての記述である。吉田による改稿の特徴の分析には、ひとまず本連載にて邦訳を終えてから、稿を改めて取り組みたい。

すでに述べたように、2つの『事典』は、いずれも、共和主義的教育改革を推し進め、学校に定着させる政治的意図のもと作られた。項目「日本」が第一版において立項され、第二版でも削除されなかつただけでなく、分量がほぼ倍増されたのはなぜなのか。また、再版にあたって吉田熊次に白羽の矢が立った理由は何なのか。こうした問いに現時点では答えることができないが、本邦訳の試みを通じて、検討の足がかりを得たいと考えている。

本翻訳の底本は1911年にアシェット社より刊行された『新版 教育学・初等教育事典』初版である⁽⁸⁾。訳稿の作成にあたっては、主に、杉山が日本語の下訳の準備、長谷川が本文中でその利用が明記されている『日本教育史略』等を参照しつつ訳稿の修正・注釈を担当した。最終的な訳文の確定は共同で行った。

注

(1) *Dictionnaire de pédagogie et d' instruction primaire*, 2ème part., t. I, Paris: Hachette, 1887, p. II.

(2) この事典は、1876年に、ビュイッソン側から版元のアシェット社に提案された、言ってみれば「私的な」企画としてスタートしたものの、1879年にビュイッソンが初等教育局長就任したことなど、公教育省内部での地位と役割の変化が影響し「半公式的な」企画に変貌していったという(尾上雅信『フェルディナン・ビュイッソンの教育思想:第三共和政初期教育改革史研究の一環として』東信堂、2007年、p. 194)。

(3) なお、1911年時点でビュイッソンはすでに初等教育局長を退いているが、注2で述べたように、ビュイッソン個人の企画として開始された経緯のある『事典』の改訂作業は、ももとの企画者であるビュイッソンが担うこととなった。

(4) ビュイッソン研究については次の整理を参照されたい。尾上雅信「F. ビュイッソンの公教育思想に関する基礎的考察(6)―初等教育局長時代の言説の検討:その1―」『岡山大学教育学部研究集録』131巻1号、2006年、101-111頁。第一版についての先行研究の主なものとして次が挙げられる。フランス語のものとして、P. Nora, 《Le Dictionnaire de pédagogie de Ferdinand Buisson, cathédrale de l' école primaire》in P. Nora (dir.), *Les lieux de mémoire*, t. I, Paris: Gallimard, 1997, pp. 327-347 ; P. Dubois, *Le dictionnaire de Ferdinand Buisson : aux fondations de l'école républicaine (1878-1911)*, Berne : Peter Lang, 2002 ; D. Denis et P. Kahn (dir.), *L'école républicaine et la question des savoirs : enquête au cœur du Dictionnaire de pédagogie de Ferdinand Buisson*, Paris : CNRS Éditions, 2003 ; D. Denis et P. Kahn (dir.), *L'école de la Troisième République en questions : débats et controverses dans le Dictionnaire de pédagogie de Ferdinand Buisson*, Berne : Peter

Lang, 2006. 日本語のものとして、上述の尾上の研究のほか、上垣豊『規律と教養のフランス近代：教育史から読み直す』ミネルヴァ書房、2016年（とくに第6章）がある。第二版については、上記のフランス語圏の研究書が第一版との比較の観点から言及しているほか、オンライン版の公開（L' édition électronique du Nouveau dictionnaire de pédagogie de et d' instruction primaire [<http://www.inrp.fr/edition-electronique/lodel/dictionnaire-ferdinand-buisson/>]）によって史料へのアクセスが改善されたこともあり、第二版を対象とするモノグラフ論文も徐々に出てきつつある（cf. P. Savoie, 《Éducation et démocratie. Retour sur le Nouveau Dictionnaire de pédagogie de Ferdinand Buisson (1991)》, *Éducation et didactique*, 6-1, 2012, pp. 117-126.）。

(5) デュボワによる『寄稿者総覧』でも、これが吉田熊次であると断定されている（P. Dubois, *Le dictionnaire de pédagogie et d' instruction primaire de Ferdinand Buisson : répertoire biographique des auteurs*, Paris : Institut national de recherche pédagogique, 2002, p.141）。なお東京帝国大学のフランス語訳が通例の Université impériale de Tôkiô 表記でない理由は定かでない。

(6) 『官報』1907年10月28日。

(7) フランスでの吉田の動向については、いまだ不明な点が多い。ドイツでの活動については、教育勅語の独訳作成を中心に次が詳しい。平田諭治『教育勅語国際関係史の研究：官定翻訳教育勅語を中心として』風間書房、1997年（とくに第1部第3章）。

(8) F. Buisson (dir.), *Nouveau dictionnaire de pédagogie et d' instruction primaire*, Paris: Hachette, 1911, pp. 889-895.

資料から見る「教育」の歴史②

—『予科会誌』（慶應義塾予科会）—

やまもと たけし
山本 剛（有明教育芸術短期大学）

ある私立大学の講義で、旧制高等学校（以下、旧制高校）を扱うときは、山田洋次（旧制山口高校卒）監督によって映画になった『ダウタウン・ヒーローズ』（1988年公開）（原作早坂暁・旧制松山高校卒）をたまに観る。

独特の旧制高校生たちの文化を理解することがねらいだ。とくに寮内での彼らの会話は解説を要する。

たとえば、娼婦の咲子を女人禁制の寮内で匿うときの議論では、「メツチェン」という表現がでてくる。これは少女を指すドイツ語の「メートヒェン Mädchen」がなまったものである。

旧制高校で大きな比重を持っていたのは外国語教育、つまり、近代日本のエリート候補生たちは、二か国語訓練（英語とドイツ語ないしフランス語）が重視されていた。旧制高校を理解するうえで、先の映画に出てくる生徒たちの会話に注目するのも面白い、と講義では締めくくる。

ところで、旧制高校の教育を受けた人々の回想類を見ると、学習ディシプリンに関する多くの記述が、圧倒的に外国語に置かれているのに対して、一方の旧制私立大学生たちのそれらはあまり明らかにされていないのではないかということである。これまでの通説は、旧制高校生に比べて、私学生は外国語訓練の期間と機会が比較的少なく、官学生に対しては語学力が劣っていたということである。もっぱら筆者の関心は、私学生の学習面も含めた私学の学生文化にあった。

慶應義塾大学予科生の機関雑誌である『予科会誌』第19号（昭和13年2月、慶應義塾予科会）を見ると、1938（昭和13）年度の予科祭の様子を伝える「予科祭点景」という記事に目が留まった。

—食堂にて—

うら若い美しい令嬢が四人、カレーの皿を受け取つてまごまごして居る。

之も予科祭ならではの珍景であらう。

「運動会や展覧会を見て居るよりもこの方がよつほど面白いな。」

友人が御飯をほぼばつた口をもぐもぐさせながら云つた。

「今日の飯が何時よりうまいなあ。運動したせいかしら」

眼鏡をかけた一人の塾生がかう云ふと、

「今日はね、男ばかりでなく美しいメツエ恩も交つて居るからだよ。ハツ、ハツ、ハツ」

もう一人の丈の高い其の友人が答へた。

いつもの校内では接することがない女学生であろうか。ただし、ここで注目されるのが、慶應生も「メツエ恩」という言葉を使っていることである。

さて、『予科会誌』をめくると、先に述べたような私学生が、官学生に比べて、外国語訓練の期間と機会が少なく、語学力が劣っていたという指摘は、どうやらそうとも言えないのではないかと思えてくる。彼ら慶應生も十分に外国語訓練を受け、そして、語学に苦しめられていた。

同誌に投稿された「塾内雑感」や「塾内評論」には、「原書」と外国語に予科生活の大部分の時間を費やすことに対する不満が散見される。たとえば、以下のようである。

大学予科生の「我々は語学の奴隷である」。「何んでも彼(ママ)でも語学でやり」、「外国語の勉強に大部分の時間とエネルギーを費」やしているのである(『予科会誌』第1号(大正15年12月))。

しかも、実際の生徒たちは「原書を十分に理解出来ていない」し、「日本語でも難かしい哲学等わかりよう筈がない」のである。これは、「塾当局及全塾生の深甚の考慮を要するの問題であるまいか」(『予科会誌』第2号(昭和2年6月))

と、「原書を使用させ」て、外国語学習に消化不良をおこさせる学校の教育方針を痛烈に批判するものである。

生徒は、大学予科の学科課程に関して、「予科での英語の時間」配当が多く、さらに、その他の科目の多くに「原書」が使用されている教授方法に対して不満をもっていた。

同誌に掲載されたものから判断して、慶應義塾の大学予科も、旧制高校と同等に外国語の学習が重視されており、生徒も外国語訓練に重きを置いていたとみるべきであろう。

生徒は、外国語を重視する予科教育に関して、「到底高等普通教育として満足な知識は得られない」と述べる。実際の予科生は、「肝心の日本語を了解せず、東洋に対する知識も浅薄で」、大多数の塾生が「原書一つ読了することも出来ない」。この原因は、「英語の問題」と「他の科目に多く原書が用ひられてゐるので、毎日接するのが大部分英語か独逸語で国語に接することは少ない」からであると、外国語の学習で占められる予科教育の問題点を指摘する（『予科会誌』第5号（昭和3年12月））。

こうした意見は、一部の生徒からの意見であるかもしれない。しかし、私学生（慶應義塾予科生）も外国語訓練で十分に苦しんでいた、と言えるのではあるまいか。

『嘉納治五郎』(1964年)を読む(5) 第五高等学校校長

としての活動に関する後年の嘉納の見解(その3)

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

はじめに

『嘉納治五郎』(講道館、1964年)で注目したトピックを紹介する本シリーズの第121号と122号では、木下広次の第一高等学校寄宿舎自治方針に対する嘉納治五郎の見解を紹介した。嘉納治五郎は、木下広次によって導入された第一高等学校の寄宿舎自治制に対して、生徒の寄宿舎生活が強制ではなく自治を基本に行われることは重要だが、その前提として校長の理想に基づく指導が必要であることなど、批判的な見解を示していた。

そこで本号では、嘉納治五郎が高等学校においてどのような教育上の理想を持っていたのかを検討するために、嘉納が第一高等学校長(1893年6月15日から9月19日に在任)よりも前に実践した第五高等学校長(1891年8月から1893年6月まで)としての活動に関する見解を示す史料を紹介する。

用いる史料は、『作興』第8巻第8号(講道館文化会、1929年8月発行)に掲載された「教育家としての嘉納治五郎(六)」である。本号で扱う箇所も、『嘉納治五郎』(講道館、1964年)における記述と似ているが、『作興』の記事は嘉納に対する聞き取りであること、『嘉納治五郎』が嘉納治五郎の死後に編集されたものであることから、『作興』の記事を紹介する。

生徒のために身を挺して誠心誠意取り組む校長像

以下の史料で述べられている第五高等学校校長であった時期の活動についての嘉納の見解は、次のように要約できる。

優秀な教員の獲得に力を尽くしたこと(優秀だが奇行も見られたハーンを採用した)と、予算不足で柔道設備が未整備であったなかでも仮設の道場(土間

に畳を敷いただけ)をつくり、校長自ら柔道を指導したことを、つまり、校長として生徒のために身を挺して取り組んだことを印象に残った活動として振り返っている。そして、ボート部廃止という一見強権的な措置をとったにもかかわらず生徒からの苦情がなかったのは、嘉納が生徒の健康のために誠実に取り組んだためであったとしている。

つまり、嘉納が第五高等中学校時代に目指した校長像というのは、身を挺して生徒のために誠心誠意尽くすことで生徒からの信頼を得て、時には生徒の自治的な活動と矛盾するような事であっても生徒のためであれば断行し、それが生徒にも理解されるという姿であったと考えられる。

次号では、嘉納治五郎の指導の原点であったと思われる、1882年創始の嘉納塾での指導について紹介したい。

さていよいよ熊本に赴任して見ると、何分にも学校は小さく、経費も従って少なく、教授として有力なる人材を網羅するといふことも困難で、如何にして自分の仕事を進めていくかについて、少なからず、苦慮したが、もとより、飛びはなれた名案もない。(27頁)

学校長として自分のしたことは数多いが、普通のことは措いて、唯二三を記すこととする。

ラフカジオ・ハーンを島根県中学校の教師から抜いて之を招聘したことは特筆すべき一事である。ハーンは何人も知る、珍しき人物で、当時英米を通じても類ひ少なき文豪であり、頗る変つた非凡の人であつた。(略) 英語並びに英文学の教師として価値の豊かな人であつたことは論ずるまでもないが、人間として亦いろいろの奇行を遺した。(略)

なほ一つの事は、自分が熊本に行つて見たら、学校にも柔道が課せられてない。学生に柔道を教へないのは、自分の学校として甚だ物足りない。併し、教師を備ふ、費用も、道場をつくる費用もない。やむなく、生徒控所の堅い土間に畳を布き、

自分親ら教授し、書生に手伝はせて、漸く柔道教授を開始した始末であつた。熊本は元気なものが多い処であるが、土間其儘の処に畳を布き、すぐと乱取を始めたのには、流石熊本の人も多少、驚いた様子であつた。其後おひおひ教師を聘し、ねだのある道場も出来る様になり、正式に柔道を教へる様になつたのであつた。

更に一つ思ひ出すことは、自分が赴任した頃は、学校にボート部があつた。なる程、学校の近くに白川はある。併し、ボートを浮べるには足りない流れである。ボートを操縦するには、遠くはなれた江津湖まで往かなければならない。そこで考へた。ボート部においてボートを操縦することは、河海の近くであつてこそ適當である。然らざるに、ボート部をおき、遠方まで毎日出掛けては、時間を徒費すること多く、又、たまに往く様では身体の練磨にはならない。加之、たまに出掛けて一時に烈しく練習をする様なことがあつては、却て身体を害ふ憂がある。熊本高等中学校はボート部を廃止するが却て生徒の教育に忠なるものであると考へたので、これまであつたボートを大村中学校へすべてやつて仕舞つて、ボート部を断然廃して仕舞つた。之に対して、生徒も苦情をいはずに済んだのであつた。これは、第五高等中学校の生徒は、無気力な為に黙従したとは認められない。多くは所謂九州男子で、なかなか勢ひのあるものもあつたのである。併し、自分が眞実に生徒の為をおもひ、誠実を以て断行したから、すらすら行はれたこととおもふ。此一事を考へて見ると、今なほ自分に非常な愉快的な聯想を持来すのである。

(p29~p30)

(次号へ続く)

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は続けます。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の典拠を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくにまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

さいたま市のある中学校では、3月の卒業式において、在学中に長期欠席しがちであった生徒ら数名を会場である体育館の1階とは別に、同館2階の平均台に終始座らせていた…ということが報道されました。生徒の保護者から、この扱いはあまりにも不当ではないかと通報があつて明らかにされたといひます。式に参加していた教員らは、なぜ?2階の平均台に生徒らが座っていたのかなど、事態がよく分からないと弁明しています。これを受けた教育委員会も、当該学校長に相応の注意を与えたと聞きます。生徒の保護者が、実際に違和感を生じて不当な扱いではないか…と通報するぐらいですから、式に終始参加していた教員らが、まったく気付かなかつたという認識は、正直不自然だと思ひます。この学校では心から、蛍の光などを歌えるのでしょうか。この卒業式での生徒らへの扱いを、学校側の体罰?とみるか…はいろいろ意見もあるでしょうが、当該学校の教員らが、この事態に対してよく分からないなどとロクに弁明していることは、教育者としての適性を疑うほど、とても罪深いものと感じますね。(谷本)

照沼康孝『日本史教科書検定三十五年』(吉川弘文館、2025年)を読みました。日本史教科書検定に長年たずさわつた元教科書調査官である照沼康孝氏の回顧録です。教科書として適切かを調査する検定現場の実態がとてもよくわかりました。大学の講義でも、実際の検定側からの意見を学生に伝える貴重な証言であると思ひます。(山本剛)

北海道の公立高校教員の菅野真文氏による実践記録「異性装する「わたし」の授業」(全国高校生活指導研究協議会編『高校生活指導』第219号、2025年3月1日)を読んだ。このなかで菅野氏は、自ら異性装者としての実存を開示しながら性的多様性について講じた授業、「かわいくなりたい」の実践について報告している。この報告のなかで、前時の授業で自らの悩みを開示した菅野氏が、次の授業に異性装で登場した際に生徒たちが笑つたことを紹介している。そして、この反応を、マジョリティ特権による差別的な反応であることを授業で言及し、その結果、生徒たちは一様に「ハッ」とした表情を見せていたという。また、菅野氏の異性装を静かに受け止めて、性をめぐつて自身が抱いてきた痛みを語る感想を書く生徒もあつたことが紹介されている。

こうした教師の実存を開示する教育実践について、その「中立性」の危うさを指摘する声があるかもしれないことを菅野氏は予想しつつ、次のように述べている。「本実践は、教師自身の実存から出発しているがゆえに「中立」ではあり得ない。それが独善や価値注入にならないか、点検は必須だ。一方で、巷間に「中立」と言われるものは、価値からの逃

避に過ぎず、社会構造の問題を是認し、温存する働きを持っていることも忘れてはならない。民主的社会的実現のために、どのような価値を教室で作り出すか、議論が必要だ。

教師の仕事の可能性を広げる新しい実践をする教師が、今もあちこちに存在しているのではないか。学校現場の現状を単純に絶望せず、いろいろな教育実践を知ることは意味があるのではないか。そんな気持ちになった。(富岡)

会員消息

新年度が開始されましたが、この時期自然と履修の3~4年生から、就職活動を理由とした欠席のお知らせが多いことをとても実感します。個別説明会や面談、採用試験や内定式などといった事情です。大学にもよるでしょうが、おおむね授業担当教員らの判断により、これらの欠席願いについては扱うものとされています。ちなみに、私が受け取った欠席願いのなかには、○月◇日△時、某メーカー支店にて会社面談のため・・・という具体的な事情が記されたものも多いです。ちょうどそんな折り、『東京新聞』(2025年4月19日)を読んでいたら、文筆家の師岡カリマさんが「大学とは、企業のいいように使われない独自の思考力と見識、そして組織が間違った方向に行こうとしたら“それ、ダメでしょう”と言える自信を育む場所だ」として、「学期中のリクルートは、もっと厳しく規制するべきではないか。長期的にはそれが企業の、そして日本の利益にかなっている」と主張していました。この師岡さんのご意見は少し過激?かもしれませんが、みなさんはどのようにお考えになるでしょうか。ただ大学におけるキャリア教育のさらなる充実は、現代の方向性において重要な課題であるともいえますので、どのように対応していくのが望ましいのか、現場の教員の姿勢がまさに問われている・・・と痛感します。(谷本)

新年度に授業で出会った学生たちは、なぜか例年よりも意欲的な人が多いように感じます。授業中に数人で意見交換した感想を書いてもらっていますが、話し合いで新たな視点が得られたことを生き生きと書いた感想がいくつもあり、励まされます。一方で、授業後に書いてもらっている小課題では、AIにつくってもらった「解答」の影響が大きい答案も見受けられます。授業をすることの意味が、これまで以上に問われていると感じています。

吉田寮を廃寮から守り、21世紀に活かしていくためのささやかな取り組みを元寮生の一人として続けていますが、5月24日に連続公開学習会「吉田寮と京大」学第11回を開催します。テーマは「文化財保存運動の観点からの京大寄宿舎(吉田寮)に関する提案」

— 保存・活用に向けた基礎知識(2) — (話題提供は、考古学者で元寮生の中尾芳治さん)です。詳細は、「21世紀に吉田寮を活かす元寮生の会」ブログ <https://yoshidaryo.cloudfree.jp/> をご覧ください。

また、昨年台風の影響で中止になった旧制高等学校記念館の夏期教育セミナーが2025年8月30日・31日に開催されます。「記念館だより」第93号に掲載された開催概要(2025年4月現在)を、ニュースレターのみなさんに見ていただきたく、転載いたします。ぜひ、ご参加ください(富岡)

第28回夏期教育セミナー 開催のお知らせ 「生徒自治って古い? —学校における生徒自治の歴史とこれから」

昨年の夏期教育セミナーは、台風接近に伴い直前での中止となり、参加を予定されていた皆さまには大変ご迷惑をおかけしました。この夏の夏期教育セミナーは、昨年予定していたテーマを中心に、研究発表を含めた2日間の日程で開催いたします。

1日目の基調講演には、2023年に『深志の自治—地方公立伝統校の危機と挑戦』(信濃毎日新聞社)を編著者の一人として上梓した、井上義和先生(帝京大学教授)をお招きします。また、2日目の研究発表会では、学生と自治、生徒会などについて独自の視点から研究している3組の方から、研究成果を発表していただきます。

全国には旧制中学校等から続く、「伝統校」と呼ばれる高校が存在します。これらの高校には独自の「自治の伝統」が息づいていますが、このような伝統には教育的な機能がある一方、様々な課題があるのも事実です。

短期的でわかりやすい成果を求める教育改革や、市民感覚とのズレによって、全国の歴史ある高等学校に根付く「自治の伝統」が危機に瀕している今、その伝統をいかに評価し、未来に向けて更新していくかを議論します。

《開催日時と内容》

日時 8月30日(土)、31日(日)

場所 あがたの森文化会館 講堂



第21回夏期教育セミナーの様子
(あがたの森文化会館 講堂)

【1日目 基調講演ほか】

8月30日(土) 午後1時～5時

■基調講演

『深志の自治』から考える未来の伝統校
井上義和さん(帝京大学 共通教育センター
教授)

■指定討論

「伝統」を相対化するには
加藤善子さん(信州大学 高等教育研究センター 教授)

【2日目 研究発表会】

8月31日(日) 午前9時30分～午後3時

■研究発表1

旧制松本高等学校と「自治」－『校友会雑誌』を中心に
森いづみさん(県立長野図書館 館長)

■研究発表2

「生徒自治」から「生徒会」へー占領期文部省の理論的展開を中心に
猪股大輝さん(東洋大学 文学部教育学科 助教)

■研究発表3

安積歴史博物館中学校資料の調査成果(仮題)
田中祐介さん(明治学院大学)、和田敦彦さん(早稲田大学)

■研究情報交換会(自由参加) 午後1時30分～3時

—参加者間で研究関心・研究関連情報などを紹介し合い交流。

《参加申し込み》

- ・参加費無料。
- ・参加には事前申し込みが必要になります(お名前、連絡先など)。
- ・参加ご希望の方は、旧制高等学校記念館まで、メールまたは電話(連絡先は8ページに記載)によりご連絡をお願いいたします。
- ・当館では宿泊先等を確保しておりません。2日間ともご参加の場合で遠方からご来場の場合、宿泊先はご自身で手配していただくことになります。お手数をおかけしますが、よろしくお願いいたします。

- ・悪天候などのため、会場での開催が不可能と判断した場合は、オンライン開催に切り替えて開催いたします。
 - 詳細は当館ホームページや次回の記念館だよりでお知らせいたします。

皆さまのご参加をお待ちしております。

本ニュースレターのPDFファイルをダウンロードし、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」で印刷すれば、A5 サイズの小冊子を作ることができます。